

# 水の子灯台を訪ねて

武田 剛

(会員 佐伯市木立目筈)

私はずい分長い間、「水の子灯台」に行行って見たいと思いつけてきた。いつ頃から水の子を意識したかということ、戦死した兄の佐伯中学の級友に「田部連太郎」さんという人がいて、「タベレン」というアダ名がついていたが、そのタベレンさんがわが家に柿喰いに来た時、兄が「そりゃ洪柿ぢや、タベレンぞ」などと、がまつて（からかう）いたが、田部さんのお父さんが水の子の灯台長というのを聞いた時から、水の子が頭にこびりついた。長じてから、何かの用事で、佐伯は八幡にお住まいの、アララギ派の歌人として有名な、大島藤太郎さんのお宅を訪ねたとき、座敷の鴨居に菅一郎先生の書がかかっていた。先生の書は絵と同様に素晴らしい。一見、西郷南洲風であるが、南洲より字が美しい。額には「佐伯照らせば四国が暗い、四国照らせば佐伯がくらい 恋の水の水

子二ご路」とある。

菅先生は短歌や俳句もたしなまれ、時折自宅で歌会を持つ程の文人であったから、この都々逸も先生の手作であろうが、あんな綺麗な竹田美人を奥さんにしていたのに、何か別の恋の悩みがあったのだろうか。

たしか先生の帝展特選の絵は佐伯の名妓がモデルであったが、謹厳な先生の人格からみてそうとも思えない。しかし、芸術家に恋はつきもの、何しろゆれ動く恋心の振幅が、豊後水道をはさんで四国・九州とは豪勢である。特選の名画「婦人像」は関東大震災が戦災で焼失したのか、その所在は「杳」としてつかめず、ただ当時の新聞や絵葉書に残されているだけである。しかし、その絵葉書に残っているだけで、日展七十年史の内の、大正十年を代表する名作として紹介され、紹介された七十枚のうちの四枚の肖像の中



四国側から見た水の子

では、一頭地を抜いて目を引く。次に目を引くのはあの「中村葬」の「エロシエンコの像」であるが、これは重要文化財に指定されている。今、菅先生の「婦人像」が残っていたらおそらく重文は間違いないだろう。

この絵葉書の名妓の肖像は、その眸に女の哀しみがあふれて、たまらなくあやしく美しい。あのモデルはなぜあんな眸を画家に見せたのであろうか。どうかしてそんなモデルにめぐり逢いたいものだ。

私はよく家内をモデルにするけれど、絵を描く時は一度としてあんな哀しい情炎の目を見せてくれた事がない。まあ望むべくもないか。何しろ木立の素朴なモデルは、すぐ居ねむりを始めるから。しかし、私の様に恋に小心な芸術家(?)にとつては、居ねむりモデルが無難であるが、それにしても恋の振り子の中心にされた水の子灯台とはどんなものか、ますく心がかれた。

丁度そんな時、父の教え子で鶴見町は有明で瀬渡しをしている速見一己さんが、「新・喜びも悲しみも幾歳月」のロケで、木下恵介監督や紺野美沙子さん達を船で水の子に運んだ」というのを聞いて、「しまった!! 弁当

運びでもして、連れて行って貰うんだ」と思ったが、後の祭り。

来年は七十歳になるという昨年、早く行かねば年をとつてしまうと焦って、得意の油絵で速見さんの肖像を描いて進呈し、「水の子に連れて行って下さい」とたのんだら、「そんなら今の船がややおそいので、いい船を造つて連れて行きましょう」と言う。待つ事半年、三千万円もかけて、まるでアランドロンが地中海でぶつ飛ばす様な洒落れた快速船を建造し、「さあ、どうぞ」と言う。スピードは三五ノット、ざっと時速七十キロ、自動車でも七十キロはほとんどの道路でスピード違反の速さ。

昔の高速巡洋艦「最上」に匹敵する速さだ。早速めばしい友達連中に「水の子に行かん」と声をかけたが、驚いた事にほとんどの連中が水の子に行っている。たいてい磯釣りである。「知らぬは亭主ばかりなり」という感じ。だがまだく行ってない人もいて、私の画友の「散髪のヒラタ」の平田昇さんを誘ったら、大そう乗り気になった。平田さんの絵はメルヘン風で優しく美しい。平田さんが佐伯を描いた絵を、姉妹都市の中国の邯鄲市で展示したら、大そうな評判になった。だから邯鄲市の

人々は、佐伯が邯鄲の夢に出てくる様な美しい所だと思  
い込んでいるらしい。

この平田さんが水の子を描いたら、どんな美しい絵に  
なるか楽しみにしていたら、丁度行く日にお客さんが多  
くて、奥さんの許可が出ないと言う。奥さんは「秋乃」  
さんといって、優しい名前前で草花を大そう愛する人であ  
るから、奥さんが「駄目!!」と言ってやめたのではなく、  
おそらく折角来て下さるお客さんをほったらかしにして、  
物見遊海には行けないという平田さんの職人気質かたきがそう  
させたのであろう。だから平田さんの絵が草花より美し  
いのだ。それで平田さんの友人の高宮昭夫さんと、私の  
義兄の高畑巖兄をさそい、速見さんの奥さんや、マンガ  
家の冨永一朗さんから名前を貰ったという孫の一朗君も  
初めてといって同行。

絶好の風で薄ぐもりの六月十二日の午后、有明出港。  
船長は一己さんの息子の幸四郎さんで、紺の船員帽にア  
ゴヒモを掛けると、まるで昔の駆逐艦の艦長の様にたの  
もしい。

なにしろ速い。名前からして「速見丸」である。  
鯖浦さびらの切の鼻、白崎をあつ!!という間に後にする。真白

く盛り上がる航跡、大きな波やうねりの頭を飛び越す様  
に走るので、ゴトン／＼と衝撃が激しい。

この日のためにしびれを切らして買ったコンタックス  
AXにドナーのレンズ、潮風にさらすのはもったいない  
カメラだけど、大事にしたってあの世に持ってゆけるで  
なし。

ふと、「ああ、ここらあたりだ」と思ったのは昭和十  
六年の秋、私は戦艦「大和」を見たのだ。勿論、その時  
は大和というのはわからなかったけれど、「どえらい軍  
艦がいる」というので、父と押し船に乗せて貰って見に  
行ったら、この白崎沖に巨艦がいたのだ。「長門」や  
「陸奥」がくらべものにならないヤツが。ああ、今なら  
どれ程写真に撮っただろうか。大和をはじめ、佐伯湾を  
埋めつくした軍艦はすべてまぼろしの如く、いずことも  
知らずみな沈んでしまった。ほとんどの艦が水の子を見  
ながら、水の子の灯に送られて出撃したのだ。

そんな想いがめまぐるしく頭をよぎるうち、前方かす  
かにそれらしき高い塔が見えて来た。水の子灯台である。  
ぐん／＼近づく。予想にまさる偉容である。ひょうびよ  
うとした四国も九州もはるか遠くかすむ、豊後水道の真

ん中に頭を出している巨大な岩礁。海の深さもここらあたりは百から百五十メートルというから、まるで佐伯の城山の様な岩山が、海底からそびえ立って鋭い岩の頭を出しているのだ。「なる程、こりゃ灯台を造らんとぶち当てるわい。」と納得。

島のまわりは青黒い潮がうずまき、湧き上がる潮と波がぶつかり、三角波が立って、不気味なジャブ〜という音を立てる。潮の流れは早く、まるで番匠川の洪水の時の様だ。島を巡ると島の形が変わる。四国側から見ると灯台の下はえぐられた様な崖になっていて、今にもくずれ落ちそうな有様だ。

今まで写真で見た水の子は、こじんまりとした感じだったが実物は違う。凄い迫力である。濃いコバルトとも見える潮の大きなうねりが、茶褐色の小山の様な岩礁にぶち当たって舞い上がり、滝の様な白布を作って流れ落ちる。その岩礁は高さ二十メートル、大きな岩の割れ目が縦横に走っているが、びくともする風はない。

その上に白黒の塗装が、風波ではげ落ちて灰色にくすんだ灯台がそびえ立つ。その高さ四十メートル。海面からは計六十メートルの高さだ。堂々たる威風にまさに圧倒された。こ



鶴見側から見た水の子

んな凄いのが百年も前から、つい目の先の豊後水道にあったのに、オレともあろうものが今まで来なかったとは。なんと人生が怠慢であったことか。

鶴見の福良水産の福良成志朗さんは、かつて南海新報に連載してもらった私の「中国旅行記」を読んで感動してくれ、その感動が二十何年も尾を引いているのか、今だに度々魚を呉れる有難い友人であるが、そのお嬢さんの雅代さんが役場に勤めているので、水の子の資料をお願いしたら、いろ／＼貴重なものを揃えてくれた。

(別紙添付)

そこで、<sup>かんじん</sup>肝腎などところだけ書いてみると、島の面積は三千三百四十八平方<sup>メートル</sup>だから約千坪、三反歩もある。「ほー!」という広さだが、平地のところでなく海面で横切った面積だ。それにしても木立の圃場整備した田圃の一枚の広さが三反歩だから、水の子がこんなに広いとは知らなかった。高さも二十五<sup>メートル</sup>あったのを四・五<sup>メートル</sup>削って基礎を打ち、灯台を建てたという。光塔は山口県の徳山から御影石を運んで来て、四十<sup>メートル</sup>の高さに積み重ねている。

この絶海の孤島のまわりは、世界中でも指折りの波の高い豊後水道。まだ私達の記憶に新しいのは、水の子のそばを航行していたタンカーの菱洋丸六万トンが、巨浪のため胸中からくの字に折れた事故で、船首と船尾を空

に突き上げた哀れな姿で、しばらく佐伯湾に浮かんでいた。世界の海で、波のためタンカーが折れた例がほかにあったらうか。

こんな凄い波浪の襲<sup>おそ</sup>う岩礁の上に、灯台を作るのは想像を絶する難工事だったと思われる。そうであろう。「今日はずらしい風だ」と船長は言うが、それでも

「どうして接岸するんだらう」と心配になる位大きなうねりがある。瀬渡し船の接岸は船首にくくりつけた大きなタイヤを、全速力で岸壁に押しつけて、波が引いても船が離れない様にするのだそうだが、百年も前の蒸気船では、とてもこんな接岸は出来なかったのではあるまいか。そんな時代にどうしてこれだけの御影石、巨大レンズ、発光機械を荷揚げしたのか、それを二十<sup>メートル</sup>の岩の上に持ち上げ、四十<sup>メートル</sup>の高さに積み重ねたのか。つく／＼眺めながら、「いったいどうして造ったんだらう」とタメ息をつき、技師や石工や船員の働く様を想い描いた。今から百年前の明治三十三年に造りかかったとなると、三十三年は勝海舟の死んだ年で、三十四年は福沢諭吉、三十五年は正岡子規が死んだ年だ。まだチョンマゲが残っているような時代に、こんな凄い仕事をしているのだ。

それにくらべると今の政治は情けない。目と鼻の先の大入島にさえ橋をようかけんのだから、顔が赫くなつてしまふ。

工事は明治三十三年から、四年かかつて総工費十七万四千円あまり。なんと私のカメラの半値であるが、今の物価に直すといくらになるだろうか、当時の男子の日当が三十銭、今一万円として三万倍、五十二億円か。

明治の新政府はあらゆる面でお金が必要たらうに、豊後水道の船の安全のため、かかる大金を投じたのだ。今の政治は大入島の橋さえかけず、サッカー場に三百億も四百億もかける。ざんばら髪がポールをけとばす為に。

船長が、「船をつけるから上がってみますか」と言ってくれたが、「いや眺めるだけで十分です」とことわつたのは、接岸の時に海にころげ込むかもしれない(カメラが)のと、上陸れば時間がかかつて、帰りに鶴御崎の写真を撮るのに暗くなるおそれがあったからでもあるが、やはり永年あこがれた恋人は、近くで眺めて絵に描けば十分で、何か土足で上がるのがためらわれたからである。

しかし、水の子に惜別を告げ、船首をめぐらせて鶴御

崎をめざしたとき、白い航跡の先に水の子が遠くなるのを見つめたら、「しまった!!上がればよかつた」と後悔した。せめて光塔の御影石を掌でびしゃくたきたかつた。

だが、何せ菅先生の「恋の水の子」が頭にあつて、ロマンチックに過ぎてリアルに調べる史談会の精神を忘れてしまつていた。芸術家はこれだから困るのだ。

大島も鶴御崎も、遠くに見えた米水津の横島などの風景もまったく素晴しかつた。

帰宅すると、私は早速「水の子灯台」の制作にとりかかつた。Fの三十号に灯台を見上げる様なアングルで描き始め、十日程で描き上げた。そして父と私が、お世話になつた有明の公民館に寄贈した。これでやっと永年の念願を果たして、ほっ!!としたが、どうも落ち着かない。それは今でもまぶたにはつきり浮かぶ「大和」の姿が原因である。ふと、

豊後水道ゆきて還らざる軍艦の

水浸くかばね鎮むるすべなし

という歌が出来た。

八月に入ると、「よし大和を描こう、あの水の子の海に浮かんでいる大和を」と思い立ち、初盆まわりもそこにそこにして、Pの百号に描き始めた。蒸し暑いアトリエで、パレットを持つヒジから汗がポタポタ落ちる。

そして八月一杯、約二十日間で描きあげた。これも「水の子」に並べて有明公民館に掛けて貰う事にした。

後世、有明の人達に「目の前の海にこんな軍艦が浮かんでいた事があるのだ」という事を知ってもらいたいのと、「この絵は決して戦争や軍艦を賛美するものではなく、こんな巨艦でも沈没し、戦争に敗れたのだ、そして二千四百七十四人が艦と共に沈んだのを考えてもらいたい。そのために描いた」と、絵の裏に書き込んだ。

絵を寄付したせいで、有明の敬老会に招待された。うれしくて二つ返事で快諾したが、あとで地元木立の敬老会からも、「七十歳になったから」と招待状が来た。両方に行きたし、身は一つ、心は水の子の浪の様にゆれ動いている。

絶海の激浪の中百年も

灯を絶やまざる水の子よ汝は

## 【水の子灯台資料】

### 灯台の年表

着工	明33	予算174,250円
		(内訳) 明33年度 15,000円
		◇34年度 60,000円
		◇35年度 60,000円
		◇36年度 39,250円
初点	明37,3,20	第1等レンズ、閃白光30秒に1閃光、バビエー式 石油蒸発白熱灯688,000カンデラ、光達距離37km
1次改良	大10,4,1	チャンス式石油白熱灯に改良
	◇13,4,1	発動機船による渡海開始(以前は無動力船)
	昭15,3,31	無線電話取付

- 1次改良 昭16, 2, 1 気象観測業務開始  
 ♪16, 10, 1 未曾有の大台風来襲  
 ♪20, 3, 18 米軍機第1回銃撃  
 ♪20, 5, 4 灯台要員空襲激化のため引き揚げ退島  
 ♪21, 6, 21 仮灯(ガス14立、2秒1閃光、60カンデラ)設置
- 2次改良 ♪25, 11, 15 戦災復旧、自動制御ガソリンエンジン2基、第3等大型レンズ、900,000カンデラ10秒に1閃光  
 ♪27, 9, 13 連絡用無線再開
- 3次改良 ♪28, 3, 15 自動充放電制御10馬力5キロワット2基に改良  
 ♪28, 8, 10 佐伯航路標識事務所発足(佐伯海上保安署と同居)下梶寄退息所より佐伯に引き揚げる  
 ♪29, 6, 1 巡視船による渡海業務開始  
 ♪36, 2, 10 先ノ瀬灯台竣功
- 4次改良 ♪38, 2, 28 自家発電装置Ⅱ型、4馬力2キロボルトアンペア3基、白閃光10秒に1閃光、1,200,000カンデラ、光達距離37km  
 ♪41, 12, 1 滞在期日を10日に変更  
 ♪45, 4, 11 佐伯港湾合同庁舎に事務所移転
- 5次改良 ♪52, 3, 22 6馬力ヤンマーディーゼル  
 3キロボルトアンペア3基他自動制御1式改良  
 ♪53, 1, 23 非常灯設置300ミリ灯ろう、LD管制器Ⅱ型2個、急閃光770カンデラ、12海里(約22.2km)  
 ♪53, 3, 30 監視装置設置、端局設置水の子島BW-40、事務所BW-39  
 ♪53, 5, 1 無線方位信号所設置業務開始 Po94.05メガヘルツ、150ミリワット、無指向性、半径約16.5km  
 ♪54, 12, 16 生活用電源(ヤンマーSL15.13P S)、冷暖房装置、給水装置(送水管71m)、貯水槽( $V=9.1\text{m}^3$ )、給油装置(送水管 $L=74\text{m}$ )等々  
 ♪56, 3, 25 鶴御崎灯台灯点、出力900,000カンデラ、光達距離62km  
 ♪61, 4, 1 15日毎の見回りとなる(海上保安庁訓令第11号)



- 5次改良 昭61, 5, 16 映画「新、喜びも悲しみも幾年月」ロケに木下監督、  
田中健、小坂一也、紺野美紗子他来島する。  
ㄨ61, 6, 22 同上映画、鶴見町民センターにて初上映

## 灯台職員呼称の変遷

明治初期	1868	燈明番士	
明 4,	3	1871 燈明番	「首員」
ㄨ14,	5	1881 守燈方	
ㄨ20,	6	1887 通信技手	(官吏に昇格)
ㄨ24,	8	1891 看守	
大 2,	12	1913	「看守長」
昭12,	10	1937 標識技手	「燈台長 or 信号所長」
ㄨ21,	4	1946 運輸技官	
ㄨ23,	5	1948 海上保安官	

## 豊後水道海上交通史

神話		神武天皇東征、豊後水道を北上
天慶 2	939	藤原純友の乱、佐伯は基佐伯莊を襲う
文治元	1185	平家一門壇の浦に滅び、平家の落人豊後水道を南下する。
天文10	1541	ポルトガル船豊後に漂着
慶長 5	1600	大友氏対明、対南蛮貿易 ㄨ アダムス三浦按針リーフデ号で豊後漂着
慶長 6	1601	毛利高政佐伯入封。姫島に日本最初の灯台が、小倉藩主 細川氏により設けられる。
元和 4	1618	毛利高政大島に見張番所を設ける。
明 2	1869	観音崎に日本最初の洋式灯台建つ。
ㄨ34	1901	佐賀関、関崎灯台初点灯
ㄨ37	1904	水ノ子島灯台初点灯
ㄨ44	1911	佐伯湾、豊後水道で海軍大演習。以後連合艦隊の演習場化
大 5	1916	海軍望桜、鶴御崎に設置される。
ㄨ 7	1918	佐田岬灯台初点灯

- 昭 8 1938 土佐沖ノ島灯台初点灯
- ◇16 1941 真珠湾攻撃主力艦隊(赤城等)豊後水道を通り単冠湾に
- ◇20 1945 戦艦大和豊後水道より出撃
- ◇25 1950 高茂岬灯台初点灯
- ◇28 1953 佐伯航路標識事務所開設、佐伯市竹ヶ島灯台、蒲江町深島灯台初点灯
- ◇33 1958 日振島灯台初点灯
- ◇36 1961 先ノ瀬灯台初点灯
- ◇39 1964 九、四フェリー(白杵～三崎)就航
- ◇42 1967 国道九、四フェリー(佐賀関～三崎)就航
- ◇46 1971 佐伯～宿毛フェリー就航
- ◇47 1972 太平洋沿岸フェリー(大分～勝浦～名古屋)就航。55年中止
- ◇49 1974 貨物船ウエスタンスター衝突沈没(24名不明)
- ◇51 1976 原油タンカー菱洋丸船体折損事故
- ◇56 1981 鶴御崎灯台初点灯
- ◇ 備蓄タンカー入港(竹ヶ島)信濃川丸241,936 t(水ノ子島)  
大洋丸232,423 t、備蓄期間2ヶ年間
- ◇61 1986 フェリーさいき外国貨物船と衝突

## 水ノ子島の領地争奪戦

水ノ子島は、元禄11年(西暦1698年)に毛利藩から江戸幕府に提出した絵図に毛利領とした記録があるが、昔から豊後水道の真唯中にあるこの島は好魚場であると共に、豊後水道を上下する船の航路安全の目じるしでもあった。

ところが、この島はその昔、毛利藩のものとも、四国宇和島藩のものとも領有がはっきりしていなかった。

そこで、この島の所有権をめぐる佐伯と宇和島の漁師の争いがたえず、流血事件を引き起こした事も度々とのことでありました。そして、漁師の争いはやがて両藩の争いにも発展していった。

この話は、多分江戸時代に入って間のない頃と思われるが、毛利・宇和島両藩は、この問題をどう解決するか協議することになり、その結果次の様な取り決めて決着することになり、この話が生まれるところとなった次第。

- ① 佐伯・宇和島双方は、水ノ子島に一番近い港から船を出し、早く島に到着した藩がその所有権を得る。
- ② それぞれ一番鶏が鳴いてから船を出す。
- ③ 宇和島藩の役人は佐伯に、毛利藩の役人は宇和島にそれぞれ出向き、船の出発を検分する。

この話、宇和島藩は伊達政宗の長男秀宗が拝領してから10万石の大藩、かたや佐伯毛利藩は2万石の小藩であり、力と力では勝負にならないところであった。

そして、とり決めがすむと毛利藩は大島に、宇和島藩は日振島に船を用意して、双方ともよりすぐりの水夫を選んで一番鶏が鳴くのを今やおそしと待つところとなった。

やがて、大島の一番鶏が鳴くと、それにつれて大島中の鶏が次々と鳴き出した。大島に検分に来ていた宇和島藩の役人もこれを認めないわけにはいかない。これは、明らかに宵鳥であったのであるが。「さあ、一番鶏だ！」若者は早速宇和島藩の役人を船に案内して、いち早く船を漕ぎ出した。

櫓船で交代で押して行くと、東の空が白む頃には毛利藩の船は水ノ子島に到着したが、日振島からの宇和島藩の船は影もかたちも見えない。

宇和島藩の役人は苦虫をかみつぶした顔をしているが如何とも仕方のないこと。やっと宇和島の船は日が高くなって到着。毛利藩の勝利と相成った。

宇和島藩の役人も毛利藩の勝利を認め、船上で「水ノ子島の所有地は毛利藩のものである。」という書類に調印が<sup>ま</sup>纏った。

そして、帰路は毛利藩は船に旗幟を立て、櫓声も勇ましく佐伯に漕ぎ帰った。佐伯ではお祭り以上のにぎわいで在方浦方はわきにわいたと言われています。そこで毛利の殿様は、「それにしても宵鳥を鳴かすとは大島には知恵者がいたものぞ」、とおほめの言葉をいただいた次第。

今にして思えば、その時に端を發して鶴見町大字大島字水ノ子島が生まれたことになります。

初代毛利高政侯は元和4年(西暦1618年)に農民市兵衛をして大島を拓くと古文書があり、「佐伯の殿様浦でもつ」といわれ、とりわけ水産振興には力を入れたところでありました。 (註) この話、古老の昔し話より記